

特42

750

明治十四年十月

日蓮
聖人
妙法正行錄

二
編

日蓮聖人妙法正行錄 二篇

藥王曆清澄寺ふて御剃髮の事

並蓮長師智と虚空藏ふ祈給ふ事

斯而天福元年五月十一日藥王曆ケ齡十二歳の時
ふて此より師の道善御坊深々勞り手習ふ事被教
給ふ二字三字ある迄して筆法書躰被書成あゝ年
來修練の人乃如し當山自南一里余ふ二間寺と云
ふて此坊ハ道義とて道善ケ俗縁の兄ふてあるが

今日茲ふ在志て薬王曆が凡人成ぬ扱見て此兒ハ
往々我が宗風扱も輝爲可堪能恩惠て教給と舌扱
卷て語ざる夫自薬王曆ハ小學と始え論語ふと云
書より惣て忠孝仁義扱諭をる儒道の書類扱教へ
讀爲むるふ一扱聞て萬を知り二遍三遍扱過志て
暗誦爲と聞ふ算筒乃水の逆飛ケ如し昔漢土の天
台大師稚かアし時父ふ伴して山寺ふ遊ぶ其寺の
住僧指招き兒ふ尊き御經扱教て取専扱と普門品

三行斗り口受かゝ教爲ふ苦も無を誦給ゆへ和尚
も不測ふ思ひ一品と殘ぞ教をるふ唯一度ふして
是扱誦ト覺爲も天台御年七歳の時成志と聞今
薬王ケ手習ふ事と云ひ物讀振の庸かゝぞ東夷東
條片海の藻扱菊海士の賤ケ家ふ懼る愛度兒の出
生爲ハ以何成事と道善も心の中ふ驚きつ又此山
ふ修學爲る所化兒達も並かゝぬ立振舞の薬王や
と云者も整ふかアざる茲ふ母梅菊ハ去つ頃其愛

兒を山ふ登せ其後絶て信も爲ぞ道法近き清澄も
海山隔つ心地志て彼方の天を打詠見人里離し山
寺ふ手習ふ業と讀書の數々多き僧達ふ暴かを持
ふをせ我父戀し母床しと泣もや爲と思わび彼山
深を尋んと幾度も胸ふ餘て言出る汝夫次郎ふ窘
見らし訪事難き清澄の山乃端てを我ケ子と霧
ふ霞ふ託つゝ憂年月を送被るるケ窄き婦女の心
ふハ思立矢も止かぬ夫ふ託て今日の日汝優曇華

の咲を心地志て磨ケ好る岩梨ふ種々の物取添て
飾磨の裾乃袷衣赤取染の肌衣はて僕の男ふ持つ
も清澄ふ趣て山ふ登ど以何ふせん女人禁制の寺
ふせは五障の雲ふ遮被て入事難き密嚴淨土心の
月も彌曇り側の石ふ腰打掛姑時憶ふ伏汎給しふ
枯木を高を脊負る寺の奴僕の山路より歸汝見
かけ喃くと呼止見此山の諸佛坊ふ學問せる藥王
ふ母ケ恭ぬ疾出て無事ふる顔汝見させよと坊の

庫裏はつて言傳て給ふと詞急を頼給は寺の男は
點頭て杉の木間森の下芽もてぬるは裏門ふや
彼方彼をして喘ぎつゝ最も重躰ふ入ふる薬王
ハ斯と聞て賢母ふハ似氣もあし出家彼をしふ爲
超る磨ヶ安否彼訪給ふハ投し磔を尋る迷ひ値
はト者と幾度り思ひ換せど併もかふ恩愛深き悲
母は逢て此儘歸ふハ不孝の罪乃深かるる登し昔唐
土ふ曾叅と云ふ孝子あり他ふ在る日其母曾叅

ヶ歸の遅き彼待とびて指彼嚙給るもハ其心胸ふ
應へ急て家ふ歸とと彼曾子ヶ母の嚙指の其子の
胸ふ通るハ親子ハ一ツ血肉ふて冥合所感の不
測成と憶換とて師の坊ふ斯と告寺門彼出て悲母
ふ値給しに梅菊ハ夫と見より走倚薬王ヶ手を取
て此年月戀煩はるハと喜の涙止るへ道道理ふ
社と思わきるる薬王磨ハ禮彼正し磨も先年慈父
ふ伴ハき叅とせて此山ふ入爲頃ハ流石ふ里乃戀

志をて時鳥ふ梅雨月心の雲も晴やくは漏ぬ軒
端ふ袖而已濡て専悲志を在るもど師の御坊の情
深を年月ふがき教の窓ふ書讀唐土ふ日本の古
事坂をへ此彼と思合て此程も心長閑き彌生空嶺
最高き松杉の黒きに交る山櫻咲かと思見も入栢
の鐘の音ふ散花吹き花より脆き夢の世ふ夢坂重
て猶覺ぬ悪業の因縁ふ繋ぎて或時ハ地獄ふ泣又
或時ハ天界ふ樂と又畜生ふ身と苦志見偶人間ふ

生て老生老病死の四苦八苦百年久敷胡蝶の夢を
見せハ罹る凡身の何り出離の期あるん誠ふ百年
乃榮耀ハ風前乃灯火一念乃發心ハ命後の礎と聞
はるる磨も頓て出家志て斯もどてしも垂乳根の
撫給るん斯黒髮坂剃落し佛の法弟の數ふ入三寶
國土の恩を報ひ一切衆生坂助る身とも成はるる
ハ先父母坂救ゆるるえせん御經ふも四恩の内父母
のおん坂第一とみ登佛も定置給ふも今生一世の

恩愛ハ水の哀の跡もふし未來永々父母の御側を
かぬ大縁が結ぶ誓の剃髪染衣夫がも思譯被た悲
母の御歎き猶深まハ磨が菩提の障ががし此上を
安否と問爲給わぬが悲母の厚情と喜可し流石ふ
長き春の日も稍傾をり木立の茂る淵陰ハ里より
早々暮にあん山路の程を心もと無はるハと最
懇ふ急せば母上を頻ふ歎息し姑時見ぬ間ふ薬王
ケ長者をる菩提の月ふ心乃聞も明びを喻可き子

ふ喻をきて嬉泪ふ胸塞り誰呼子鳥路別て泣々家
路ふ歸給ふ此梅菊ケ涙が瀧給をるが涕涙石とて
今ふ猶清澄の山路ふ残り此ふ詣爲人々の其往古
が思出で俱ふ泪が瀧にあん有るる光陰ハ弦を離
被箭自も早々春と明秋と暮て今年嘉禎三年丁酉
の冬薬王磨も十六歳ふ有るまハ道善密師道場が
淨見一山の大衆が集見十月八日剃髪の規式嚴重
ふ誦經梵唄自々導師とあり薬王磨ハ御聲潔よを

棄恩入無爲眞實報恩者の文は三遍はて唱揚翠の
黒髪を剃落し紅白の袂も墨染の袖と改給ひまゐる
此は往古天竺國淨飯大王の御子悉達太子御齡十
九歳ふして王宮を忍出て玉の冠錦の御衣は御記
念ふ止は麻の衣は玉躰ふ纏ひ檀特山ふ分登給は
ん昔の則は忍じて哀ふも尊を捨て思はる此より藥
王曆御名は是生坊蓮長と呼改は諸事を擲棄專一
佛理ふ心は委は眞言瑜伽の奥藏は學給ひ教相ふ

ハ眞言三部及び諸論等事相ふハ求聞持等の印契
は相承し法兄淨顯義淨の二人を所化僧多き其中
ふも蓮長師を深憐と學問の志は勵るゆへ夫彼と
力は得て此程を一代藏經ふ取罹り晝夜肺肝を碎
き聞給はた一日心ふ思様佛法と云は釋迦一代の
法成は今八宗十宗ふ立別と己は隨意弘る法と我
ふは佛の本意は得爲と思ひ彼は譏は是を讚更ふ
一轍無ふ似をり抑我は本師釋尊ハ何の宗旨は眞

言宗ごんそうり華嚴けごん宗そうり亦また教外きょうがい別傳べつでんの禪宗ぜんそう成なりり今いま御經ごきやうを
案爲あんぎやうふ決けつ志して諸宗しよそう兼學けんがくふ何なにとぞ大海たいかいの潮うしほふ二ふたの
味あじふ會かい如來にょらいの教法きやうぽう定さだて二ふたの道みちハ何なにとぞ其會そのかい釋しゃく拔はく
知しるんにも智ち者しやとあふてハ協きやく座ざかふぞ倅さいハ當山たうざん
の本尊ほんそん虛空こくう藏ざう菩薩ぼさつハ東方とうほう莊嚴じやうげん世界せかいの大菩薩だいぼさつふし
て一切いつせつ衆生しゆじやうふ智慧ちゐえ拔はく授じゆるんにの誓ちかひ有あ事こと大集經たうしゆきやう
ふ見みをぞを其その上うへ法堂ぽうだうふ安置あんちの尊像そんざうハ寶龜ほうきの開闢かいびやく
以來いらい稍しやう五百ごひやく有餘ゆうじよ年ねん利益りやく多おほか靈像れいざうととききるハ茲こゝふ

祈願きげん拔はく籠こもばやと湯水たうすい拔はく絶食てつじきと斷たト御堂ごだうふ籠こもて持も
念爲ねんぎやう事こと三さん七しち日にち願ねんをハ佛智ぶつち拔はく得とて如來にょらいの本懷ほんぐわい拔はく悟ご
り普天ふてんを諸宗しよそうの是非ぜひと明あ見み佛燈ぶつとうと一時いちじふ揚あて未ま
世五濁せごじやくの間ま拔はく照てうるに願ねんをハ衆生しゆじやう利益りやくの大願たいげん拔はく哀あわれ
と日本にっぽん第一だいいちの智ち者しやと成なり給たまふと丹心たんしん骨こつ拔はく削けつて祈いの
るに此御堂このごだうの側かたわらふ清水しみず拔はく湛たんし池いけあり此池このいけ水みづふ晝ひる
ん猶なほ明星みやうせいせいの星影ほしかげ赫々しつしつとして浮うび爲なるに最さいも嬉うれき奇き
瑞さいかふと彌々いよいよ丹誠たんせい祈念きねん有あ志しふ其願そのげん滿まん爲なるに曉天きやうてんふ夢ゆめ

現の境も覺ぞ朦朧をる其中ふ白髮銀の如きよて
御眼の光冷凄き異人影向有て右の御手ふ光明耀
ゆき大寶珠とも云る玉持汝が欲する智慧を
與んぞとて是を渡給ふ蓮長師右の手ふ是を受て
左の袂ふ入收給ふ嶺の嵐乃音控ひて身ふ降罹る
露時雨佛前高き見仰せよ本尊の寶龕ふ懸爲開鑰
の自せと脱て金扉ハ八字ふ開るて有るは大願
既ふ満足とぬと心中の喜悅譬取ふ物ふを此曉

來の禮讚ふ深き佛恩を報ト本坊へ歸ふんと御堂
の階砌三四段下立給ふ其折柄俄ふ胸元氣通り夥
と血を吐て其儘氣絶し倒せ臥給るや同寮の所
化是を見出し坊ふ擔ひ歸り介保爲ふ忽夢の醒爲
如き聊御身ふ勞を覺ぞ剩へ是自境智格外ふ開る
雲霧を拂て天の三光を見か如き萬法方寸ふ淨む
ぞと云事ふを辨舌まふ明了にして電光の如き一
言の元ふ衆理を決て是全く凡躰不潔の血を吐盡

一 暗ふ六根淨域證得成給爲利驗の程社尊ある
房州小湊の清澄寺ハ千光山と號と寶龜二年
不思議律師の開基ふて慈覺大師是ク中興を
ア東寺流の眞言ふ屬を本尊虚空藏菩薩ハ開
山律師の御靈作成と終此山ハ宗祖日蓮大善
薩初發心の御靈地ふして此寺ふ修學有爲事
七年ふ及ぶ悲母梅菊ケ愛別の泪を灑し涕涙
石普光天子の影域宿を明星ケ池あり凡躰

の血域灑爲處ふハ其地ふ生ぞる笹の葉ふ血
の染をる班あり今ふ凡血の笹と云傳ふ誠ふ
當山ハ大法基元の御靈地ふ

斯て曆仁三年戊戌の春ふ至り蓮長師ハ彌々勤學
暇無を木と毬乃如を丸く削ふして枕とし御身勞
と覺ゆる時ハ此枕ふ肘を倚て姑時氣域休給ふ若
眠氣付ぬをハ轉傾ゆへ快を睡ふ付難し是ハ唐土
ふて圓枕として學問ふ心寄ふる人乃造り初爲物と

慈聞を顯ふ繩坂掛々股ふ錐と刺て睡を防しも同
ト心の學びの牖夫ハ經學一世乃教是ハ内典八萬
四千釋迦如來の說給一切經と聞えしハ七千三
百九十九卷ふり然ハ大聖釋迦如來十九歳ふして
出家在く御齡三十成道有て檀特の峯坂出て寂滅
道場ふ於て十玄六相の理坂說給ふ事三七日はと
華嚴經と云ふ是釋尊說法の最初ふり是自阿含十
二年方等十六年般若十四年以上四十二年佛壽七

十二歳の御時鷲の靈山の嶺ふ法座と移爲給ひ法
華本迹二門坂說て如來出世の本懷坂述給事此ふ
八年是と法華經と云ふ華嚴阿含方等般若法華此
五時と說了被給ひ御齡滿八十歳ふして跋提河純
陀ヶ家ふ入て一晝夜涅槃經是と遺誡ふ殘とて二
月十五日涅槃の雲ふ隱給し此一代の說相と一切
經とハ名付をり蓮長師ハ此頃漸々一切經坂閱盡
今宵更闌片余月差入窓ふ涅槃經坂讀給とふ此御

經の中ふ依法不依人と云ふ金言なるや文の意ハ世
の季ふ至しバ我々道法學ぶ者詞法巧と我意を演
種々の宗肯出來爲可し是ふ依て我々入滅の後ハ
以何ふ智慧賢全其位貴全とん人師の詞ハ用不可
我々説置經文ふ依て佛法ハ判爲可と未代の規を
定給し最期の御遺言あり蓮長師ハ此御經法拜し
夜學の燈火も濕斗ふ御涙ふ咽給ひ自餘の宗肯ハ
未ど是汝知ぞ我因縁有て真言密宗の山ふ出家と

遂當宗の流義汝學ふ大日如來より密法綿々とし
て今ふ傳爲ども金剛智不空等の説汝本とし日本
ふてハ弘法慈覺兩大師私の了簡汝加爲專の多
全真言一宗既ふ佛の法ふ非忘て凡夫の法ふり亦
同御經ふ釋尊一ツの譬喩汝揚給ふ茲ふ巨ふる象
一頭と繫ぐ盲人多全聚て探り見る後ふ一處ふ會
合し一人の盲目ケ云様象ハ漆ふ塗爲桶の如し一
人ハ彌とよ我々見ざる象ハ掃帚の如しと又一一人

ハ太鼓の胴乃如しと又一人の箕の如しと衆の盲
 人諍て止せ然ハ其耳と捉爲者ハ箕の如き憶ひ腹
 鼓撫是者ハ太鼓の如きと云ひ尾鼓撚爲者ハ掃帚
 の如しと云ひ脚鼓抱爲者ハ塗桶ふ似爲と云らん
 皆是己ケ探り見爲處汝知而已ふて全き象の形汝
 辨被ふと説きば是れ我身不肖ふもども八宗十
 宗の人師塗桶よ掃帚よと己ケ得意立る諸宗門
 汝十方無礙の眸子汝開き彼の全き大象汝一睨ふ

見定可し父母養育の恩汝棄此無爲の教ふ身汝任
 爲者何ぞ凡僧傳來の教を守て如來の金言と慕ハ
 ぎふんや今ハ此山の書籍も讀盡ぬ問可師無語可
 友無し以何志て我志願を勵さん此礪村山の片邊
 土ふ虚々心汝焦事以何ふも惜き月日あり將や鎌
 倉ふ趣て其宗々の明師ふ問ひ所有和漢の書汝讀
 パ智解汝助る通經ふらんと今年秋の初つがと師
 の御坊ふ姑の暇と乞ひ清澄寺汝打立て上総下総

ふ懸り武藏ふる隅田河原ふ着給ひ是ぞ名ふおふ
 武藏野や郡ハ廣々十郡ふ渡り西ハ雨降山秩父ヶ
 嶽南ハ多摩川北ふ荒川此隅田川ハ東の境ふして
 郊原四方何百里旅人乃行方々ふ踏分て蜘蛛手ふ迷
 ふ途多々昔在原業平朝臣水禽坂見て都戀しと詠
 せし其名所も不審渡守の男ふ問へば彼方の山ハ
 待乳山面影ふ立嬉の森鶴の群を千代ヶ岡春ふ
 非と霞ヶ關罹果無き野原ふも名所ハ多は登る

がしと穗未波よる枯蘆を分宛片舟をしよぼる水
 棹の下ふ驚て立鳥よりも旅人を驚か志をる秋乃
 風野寺の鐘を吹をき日暮ども虫の音ふ心慰
 む花野路入山の端乃遠して月をへ影坂宿をる千
 草の露ふ裾打濕り夜も稍初更ふ垂爲頃海近る
 ども船寄とる浦あきゆへふ名付をる帷子の里ふ
 剽着き宿坂求ばやと思せども賤ヶ樓居の舎のみ
 あまば人宿爲可方もふ困ト果給爲坂ア茂木樺

乃生垣一圍ふる門口より旅の御僧よ宿叅せん
 と在るまじは蓮長師最喜び茲ふ一夜の惠受給ひ
 圍爐の端ふ差倚て折焚柴ふ濡る袖を乾かして
 御座爲ふ家の主ハ持佛ふ向ひ念佛志て有るるケ
 稱名終て茲ふ居倚種々の物語ふ打混て蓮長師の
 尋給やう今宵茲ふ止宿城施をせてやどりて見せ
 を以何ふぢや幼稚者の持遊獅子の頭ふ狗張紙土
 持て造る偶人の數乃雜器ふ内交て佛像社なれ怪

みて手ふ取見せを此ハ以何ふ本師釋尊の立像ふ
 て押爲金も村刷て御手ふ鼻ふ關損ト最と勿躰無
 お登ほしくと思ふも似ぬ念佛三昧我さへ此ふ宿
 せも佛法歸依の此家ふ最も似氣無事と意も解せ
 は登るハと蓮長師此家の亭主城難ト給ひるる

明治十四年十月一日御届

東京府平民

編輯兼出版人 金田儀兵衛

芝區本芝壹町目十三番地

